

# 火星



平成15年8月号

# 四大抄

山尾玉藻

青年の形代の白吾の白

穴掘りが穴の中なり南吹く

干樽のこちら向きなる昼寢覚

待たせたる人に蟬殻貰ひけり

炎昼の松見えてゐる百ヶ日

先生の留守の陶枕つめたかり

日盛りの深空ありけり戒壇院

子の嫁しし町の草市覗きけり

新盆の母にオクラの咲きにけり

銀やんま賤ヶ岳より下り来たる

# 岡本差知子百句抄

山尾 玉藻抄出

## 昭和十年〜同二十九年

冬空の今日もしづかに昏れてゆく  
マスク大きい五人の母となる人と  
月光にうろくづのごと黙したり  
汽罐車のまがねにふれて蝶ゆけり  
春昼のふしど母なるひとよこたへ  
洪水増しぬ飯を白しと見て食まず  
朝の髪落葉くはしく見て結ひぬ  
これが母の死ぬ夜か星の美しき  
たそがれの蟬のひととき食欲あり

吾亦紅わがために咲く花とおもふ  
春の雨明るき市電にひとり乗り  
てのひらにのせし蚕に見られたり  
貝雛わがまづしさを子は知らず  
かげろふや見えざる糸の両の端  
人去りて松の月明あらたまる  
鳩くぐる池をめぐりて人に逢はず  
妻にして子弟夜寒の茶を淹るる  
闇ふかく松の芯立つ音すなり

## 昭和三十年〜同四十九年

犬捕りが来てをり春の雪散りをり

去年となりゆく星空に響きあり

三つの滝三つに響けば頬白啼く

冬の蜂展墓へ提ぐる菊に来る

棚吊ればすぐ物が載り十二月

木枯の湖わたるとき湖の色

藤房の揺れてふれ合ふこともなし

いちりんの紅梅に似し臍の緒や

小さけれど夫のメロンとして冷やす

夜濯をみどり児のもの夫のもの

舟底を単衣の膝に感じをり

紅さして母なる土筆子なる土筆

新樹の夜長き象牙の箸つかふ

月明の曼珠沙華紺したたらす

### 昭和五十年〜同五十九年

出棺に蹤くを足下の露の臺

冬の夜を襖に近く床をとる

月の帰途懐中鏡冷えをらむ

一花咲くための精根冬すみれ

いち早く月の出を知る芒の穂

百合畑に入りて百合剪る音ばかり

椀ものがぬるくて枇杷の咲きゐたり

弦楽器手に手に少女たちの春

だまされてゐるやうな昼きんぽうげ

陽の芒風の芒と耀へる

二顆三顆指もて増やす龍の玉

茶の花の傍にしばらく暖まる

### 昭和六十年〜平成八年

三人がばらばらに跳ぶ春の泥  
服薬の首反らすとき紫木蓮  
黄落期星のひとつに我ら棲み  
手ぬぐひを固くしぼるや寒月夜  
一燈も無き大寒の山に対く  
日銀も庁舎も春の雪の中  
井戸替のあと燈明の炎が真直  
母の日の母の太鼓や打てば鳴る  
大寒の夕日の竹となりゐたり  
春の闇声うつくしき人と会ふ  
いつぽんの巻物となる雛仕舞ふ  
セロファンに包みし薔薇を誰も持ち  
蛩とぶ薄うすと月ありながら  
離陸機へ手を振りあつけなき晩夏

風立てば鳴るやも知れず蘇枋の実  
みのむしや五女に生まれて存へて  
月下美人ほつりと唇を開けしまま  
松原をゆつくり歩き夏終る  
室の津やすでに春光満ちあふれ  
水仙やこのみちをゆく他あらず  
二階から見る秋風のさるすべり  
もう咲かぬ朝顔の鉢並べ病む  
実むらさき地を摺るはまだ色もたず  
月育ちゆく町川の漆黒に  
まだ人の影なき朝の花筏  
上町を歩きて春の風と思ふ  
花筏業平橋をすぐ其処に  
小手鞠に物音立てぬ一と日かな

大釜に豆が煮えをり麦の秋  
ひとつからこゑ増やしゆく雨蛙  
その頃の琴の行方や夏の月  
につぼんに生れて良かりき水の夏  
月の色して舷に蹤く海月  
うしろから前から呼ばれ春隣  
春昼の留守居に頸の骨が鳴る  
花どきの楠へあつまる夕鴉  
河骨に閉園時間来てをりぬ  
佳き形して夏山の松一樹  
椅子ひとつ空ける昼餉の五目鮓  
宝塚乙女がゆくよ冬河原  
誰も居らぬ二階から閉め春の昏  
水中花の水もついでに替へにけり

金亀子もとより搦むころなし  
ゆふがほの蕾数ふる齡かな  
芒散る人に後れてゆく左右  
宵風のいま止んでゐる青芒  
夏肌着干して畳みて老いゆくか  
老人に老人の夢鴨の昼  
裏山へ横から入る春の昼  
苔の花草履揃へるとき見たり  
霜疲れして白菜の虹のいろ  
梅畑をすぐに去にたくなりにけり  
金魚玉もの食ふために眼覚めけり  
盆の日の川に圭岳ゐたりけり  
頬白の群なす秋の百日紅  
秋彼岸子に叱られてゐたりけり

# 火星作品 山尾玉藻選

鯉 幟 アイロン台に寝かさるる 八幡 飯塚 系子

播 鉢 に 正 面 ありぬ 青 葉 冷

雨 あとのつむじほどなる 苔の花

青 田 風 かなり向かうの 佐渡に雲

卯 の花に狐の嫁入り通りたる

黒 揚 羽 差 知 子 先生かと思ふ 吹田 伊藤 多恵子

籠 り音の郭公をきくみんなで聴く

拭 ひたる 椀 並べゆくほととぎす

箱 庭 の 一本道は山に入る

面 となる 木地置かれある 円座かな

聖 五月母は正座をしてゐたり 神戸 深澤 鱧

牡 丹を囲みてゐしが触りけり

雨 粒の雨垂れとなる 牡丹かな



菖蒲湯の肉色の根を嗅いでみし  
青梅の重なり合うて母の家  
虎魚身をそがるるたびに口ひらく  
おとうとに地酒注がる螢烏賊  
雪溪の端つこ潮の香のしたる  
ぎいぎい鳴る椅子に掛けをり薔薇の前  
溝凌へ明るき声の加はりし  
夏負けし母の頭の形よき  
喪主と目が合ひたり日傘たたみけり  
峡の日の水田に当る昼餉時  
花椎のよく匂ふ日を稲荷山  
早苗田に映る看取りの両手かな  
箱庭に夕べの風のありにけり木野本  
卯の花の風筋に糠買ひにけり  
ひと箸に桶の葛切けぶりけり  
よしきりのうっかかりと用忘れけり  
端切屋に男入りけり夏つばめ

宝塚 杉浦典子

八幡 大山文子

大和郡山 木野本 加寿江

# 選のあとに

山尾 玉藻

掲句も然り、「肉色の根」はあの赤むらさき色を指しており、大いに納得出来る。「嗅いで」みたところで「菖蒲」の香に他ならないのだが、ここに俳諧がある。

鯉幟アイロン台に寝かさるる 飯塚 糸子

この作家らしく視点を外して成功した一句である。またこの放り出したような表現は、一句を力強く印象鮮明にしている。大空に泳いでいる「鯉幟」も「アイロン台」の上に置かれれば只の布となる。「アイロン台」の上には二、三枚の大きな鱗があるだけである。

籠り音の郭公をきくみんなで聴く 伊藤多恵子

ここでの「籠り音」は潜む、隠れるの意の外に、遙かな音という意もあると見て良い。近頃では珍しくなった「郭公」の声、それもはっきりとは聞こえてこないようである。「みんなで聴く」の字余りも「籠り音」にはむしろ良い働きをしている。

菖蒲湯の肉色の根を嗅いでみし 深澤 鱧

この作家には糸子さんのそれと異なり、植物などを肉体的なものに比喩する特異性があり、時としてそれが成功する。

虎魚身をそがるるたびに口ひらく 杉浦 典子

この作家のある一面を見るような、俳諧味濃い作品である。「虎魚」はご存知の通り、顔ばかりのようなむくつけき魚。「そがるるたびに口ひらく」は滑稽であるが、憐れでもある。風体からして「虎魚」は動かない。

喪主と目が合ひたり日傘たたみけり 大山 文子

会葬に着いたばかりの一瞬を捉えた作品。通夜には参列せず、「喪主」とこの場で初めて顔を合わせたこともよく分かる。しかも合ったのは「目」である。「目が合ひたり日傘たたみけり」の表現の呼吸に感心させられた。

春の海あんちくしようと来てゐたり 堀 義志郎

「あんちくしよう」には真からの恨みは感じられない。どうも気が合わないという程度、それを「冬の家」ではない「春の海」が証明している。もともと俳諧とは俗なものである。(以下略)

# 恒星圈

山本耀子

マロニエの花日曜の参観日  
茅花流し母のノートのめくれけり  
杣人の声たどりゆく若葉越  
夏つばめ奈良井の宿を抜けにけり  
若菜集の初版や玻璃にみどりさす

飯塚 糸子

校倉の日永の蔭の倭かな  
葉桜の下の素振りの音なりし  
岩松を園芸店にひやかせり  
巖より巖へ風の瑠璃蜥蜴  
金魚田の脇を通れる草箒

吉田 島江

一枚はまだ代田なり鷺の脛  
四枚の熊皮のべし夏炉かな  
木の花が夕日を返す余呉の湖  
伊吹嶺のかぶさりてきし螢川  
椿象の匂ひのシャツとすれ違ふ

柳生 千枝子

仔猫鳴くひよろりと歩みては転び  
腕まくら汗の幼なの深眠り  
耽読の片頬緑射してをり  
振花の小さき花の螺施階  
桐咲けり飛行機雲の未だ消えず

米澤 光子

朽舟の中に膨れし犬ふぐり  
葉桜や今放したる魚を釣り  
指先の点りたりけり天道虫  
葉桜や稚児の動けば鈴の音  
自轉車の野良着の女陽炎へる

# 獅子座

山尾玉藻推薦

田中みのる

わたつみの宮に狂言春終る  
蛸壺にあやめの挿さる能舞台  
養生の幹に藤波高低く  
けだるさを抱き柏手楠新樹

大東由美子

大石芳三

立夏かな光まみれの対向車  
手庇の爪の銀色夏めける  
夏帽子ちいさき影を連れ歩く  
次々と顔上げにけり蕨山

武具飾るもとより床に鯉の軸  
石楠花のすとんと落ちし鎧坂  
紫陽花の海に溺るることもあり  
花菖蒲葉の直立に支へられ

戸栗末廣

高松由利子

明けきらぬ八十八夜の舟溜り  
いろいろな鯉を見てゐる朝曇  
落日に身の丈さらす青大将  
葉ざくらやまさかの人と街に会ひ

万緑や夫と歩調をあはせつつ  
ご門跡カメラ提げくる杜若  
緑陰を出でし衿元直しけり  
若葉風肩張る塔の錆朱色

堀義志郎

中上照代

竹藪の縦走路なり浦島草  
葉の数に多少ありたり浦島草  
人妻を誘うて来たり浦島草  
小緩鶏の声を覚えし一日かな

肩の毛虫払ひくれたるボールペン  
青梅雨や玻璃戸に猫を眠らせて  
青梅雨や味噌の香りのだんご汁  
梅雨深しポケットにある舌下錠